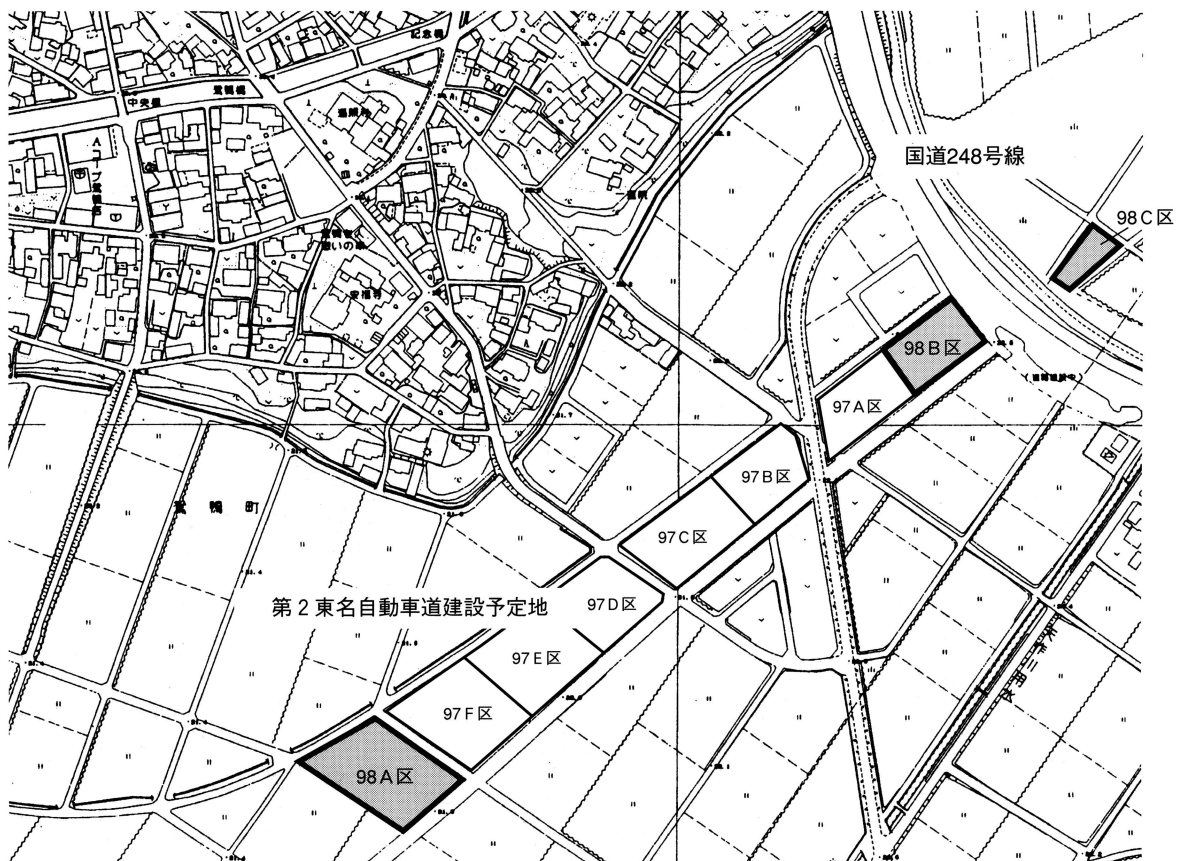


ごうがみ
郷上遺跡

調査の経過 郷上遺跡は、豊田市鴛鴨町郷上に所在する。本遺跡は矢作川中流域右岸に位置し、矢作川の形成した沖積微高地上に立地する。周辺は平坦な地形で、整然とした水田が広がる環境である。標高は約21mを測る。遺跡の北西側は数十m離れて鴛鴨の集落が所在する洪積台地があり、この縁に平行する形で遺跡は北東から南西に広がる。南東側は沖積低地を隔てて南流する矢作川に臨む。

本調査は第二東海自動車道の建設に伴うもので、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。平成8年度に試掘調査を行い、昨年度は97Aから97F区までの6調査区を設定し、20,650㎡を調査した。今年度は昨年度調査区の南端の97F区の南側にA区(3,250㎡)、北端の97A区の北側にB区(2,500㎡)C区(900㎡)を設定した。調査区の総面積は6,650㎡である。

これまでの調査で古墳時代から近世までの遺構遺物が検出されている。主な時期としてはⅠ：古墳時代～平安時代初頭、Ⅱ：中世、Ⅲ：戦国時代～江戸時代前半の3期がある。この中で中心となるのはⅠ期とⅢ期である。Ⅰ期については97A区において古墳時代堅穴住居10棟、北東－南西方向の溝などが検出されており、今年度B区に遺構が広がることが確認された。また、Ⅲ期の遺構は調査区全体に展開しているが、その中で中心となるのが、97C区から97F区にかけてであり、A区に集落が広がることが確認された。(酒井俊彦)



第1図 調査区位置図(1:5,000 豊田市基本図「鴛鴨」より)

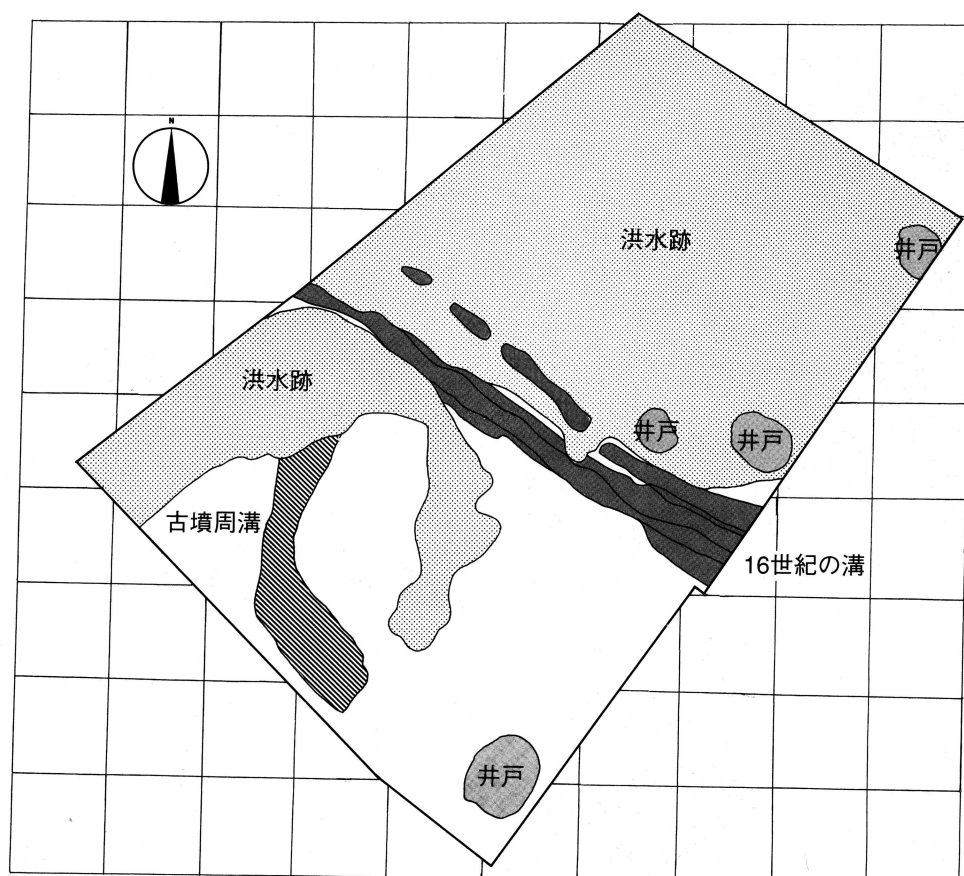
C区

C区では、耕作土下に流水もしくは地震による噴砂現象に起因するとみられる粗粒砂の堆積があり、本来遺構が確認できるはずの灰褐色砂質土層を調査区の大部分で破壊していた。その破壊部分の粗粒砂を除去すると、比較的粘質の強い遺構の埋土を中心とした残存部分があり、そこで5世紀代の古墳（周溝のみ）、16世紀代の溝・井戸が確認できた。なお、郷上遺跡北部でこれまで確認されてきた大溝は本調査区では確認されなかった。

古墳の周溝とみられる溝（SZ01）は、流水による破壊から免れたL字状に延びる一部分が残存していた。周溝は調査区の南端で途切れているが、これは当初からのもので、ここがブリッジになっていたとみられる。周溝内からの出土遺物は5世紀代の土師器・須恵器が若干ある。当該遺構を古墳周溝とみる根拠として、周溝内からではないが、流水砂中・16世紀代の溝内から円筒埴輪片・家形埴輪（鰹木の部分）が出土している点が挙げられる。なお、墳丘は完全に削平されているが、周溝の形状から推定すると一辺約15～20mの方墳であったとみられる。

16世紀代の溝は、調査区の中央を北西から南東方向に延びている。幅0.4m前後の小溝が幾度か掘り返しを受けている。出土遺物は当該期の陶磁器の他、拳大の礫が多く見られ、割られたものが多い点が特筆される。

井戸は4基確認でき、うち3基では下部構造が良好に残存していた。縦板と横棧を方形に組んでおり、井筒に曲物が使用されているのが確認された。（永井邦仁）



第2図 C区主要遺構図（1：400）

B区

B区は、昨年度調査区97A区の北東側に連続する位置にある。97A区の調査は、上・下面2面の工程で調査を行い、上面で中世～近世、下面で古墳時代の遺構を検出した。隣接する今年度B区は、これと同じ調査工程を基本とした。しかし、97A区の上面がのっていた層は北東側およそ2/3が近年の水田造成によって削平されていたため上下面の遺構が同一面で検出され、南西側を除いて1面の調査となった。

B区の基本層序は、表土として30～40cmの厚さの近年の水田耕作土が最上層にあり、その下部に厚さ30cm前後の黄褐色シルト層がある。この上部で上面の遺構を検出し、その下層の基盤層でもある黄白色砂層あるいはシルト層との境界面で下面の遺構を検出した。

今年度B区で検出された遺構、遺物は古墳時代から近世にまで及ぶが、主な時期としてはⅠ期：古墳時代後半～奈良時代、Ⅱ期：中世～江戸時代の2期に分かれる。

Ⅰ期は、細かくは5世紀代、古墳時代末（7世紀）、奈良時代の3時期がある。5世紀の遺構としては竪穴住居1棟、調査区南東部を南西～北東方向に走る溝4条（SD23・24・25・31）が検出された。竪穴住居（SB01）は調査区南東部の壁際に北半が検出され、5世紀代の須恵器が少量出土した。SD24は、97A区で南隅で南から北東方向に直角に曲がってB区にはいり、若干東よりに方向を変えて調査区を縦断してぬける。検出面より深さ60cm、最大幅約2mである。SD31は、SD24に南西部は平行して走るが、SD24にきられる形で重複する。この二条の溝は比較的深く、埋土中からは5世紀代の土師器、須恵器が多量に出土した。SD23・25はSD24より古く、遺物は少量であった。7世紀代の遺構は、竪穴住居SB11のみが検出された。少量出土した遺物から7世紀中頃の時期と考えられる。奈良時代の遺構としては調査区南部に竪穴住居10棟、北西隅に97A、B、C区に続く大溝（SD39）が検出された。竪穴住居はいずれも掘りが浅く、遺存状況が悪いために竈、柱穴等を明確にしえない。出土遺物としては須恵器が少量出土した。大溝は、検出面で幅最大7m、深さ約1.2mを測る。昨年度の調査では古墳時代後半の遺構とされたが、今回の調査で確実に奈良時代の遺物が下層から出土し、この時期と確認された。上層から平安時代初頭の遺物が出土することから、平安時代には埋積して機能を失っていたことが推測される。大溝は、洪積台地側から延びてきてB区にはいり、97A、B区と調査区に沿う方向で走って97C区で台地側に方向を変える状況になる（第3図）。

Ⅱ期は、中世と戦国時代～江戸時代前半に分けられる。確実な中世の遺構としては14世紀代の井戸が2基のみが検出された。戦国時代以降の遺構では溝による方形の土地区画が5区画確認された。これらは97A区よりのびる南西～北東方向の中央溝群とこれに直交する方向の溝を各辺として形成される。中央溝群の中心部には当時の主要路が存在し、溝の遺物の出土状況から屋敷地がその両側に展開していたことが推測される。しかし、この時期の井戸は1基のみであり、土坑等の遺構の密度も昨年度の調査区と比較してかなり粗である。文献史料等から当時期の集落は昨年度の調査区の部分が中心であり、B区は周辺部にあたることが推定されている。遺構の状況はこのことと一致しており、屋敷地として利用されてはいるが、その期間は相対的に短いものと考えられる。（酒井俊彦）



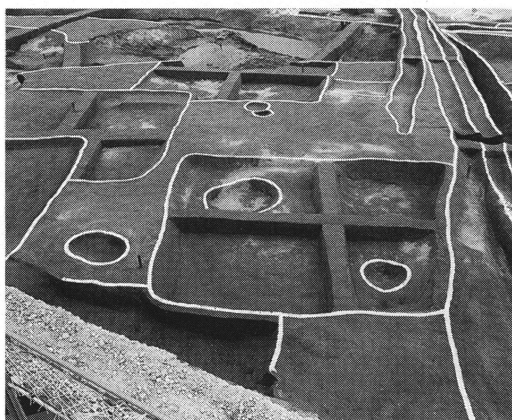
B区全景（南西より）



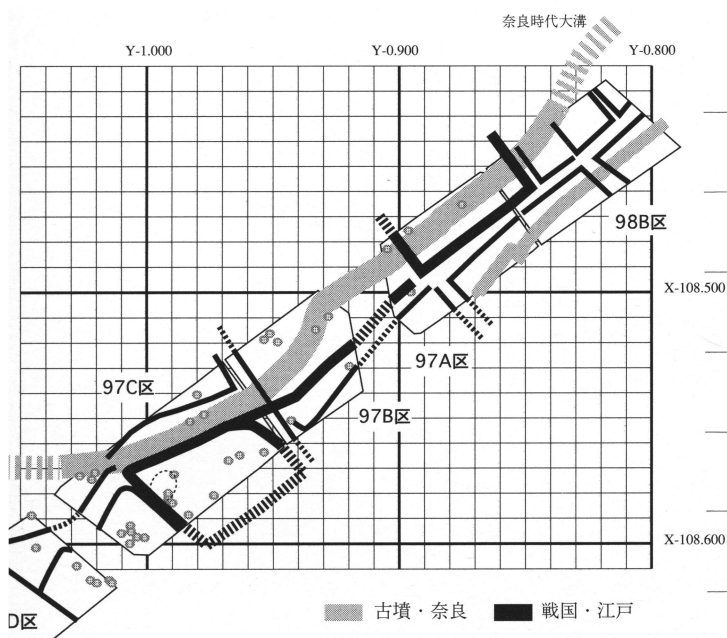
S D24・31（南西より）



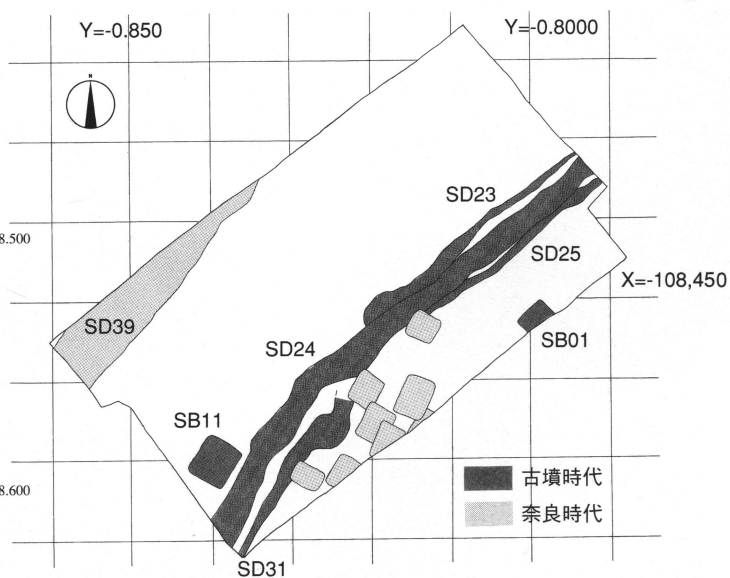
S D39（南西より）



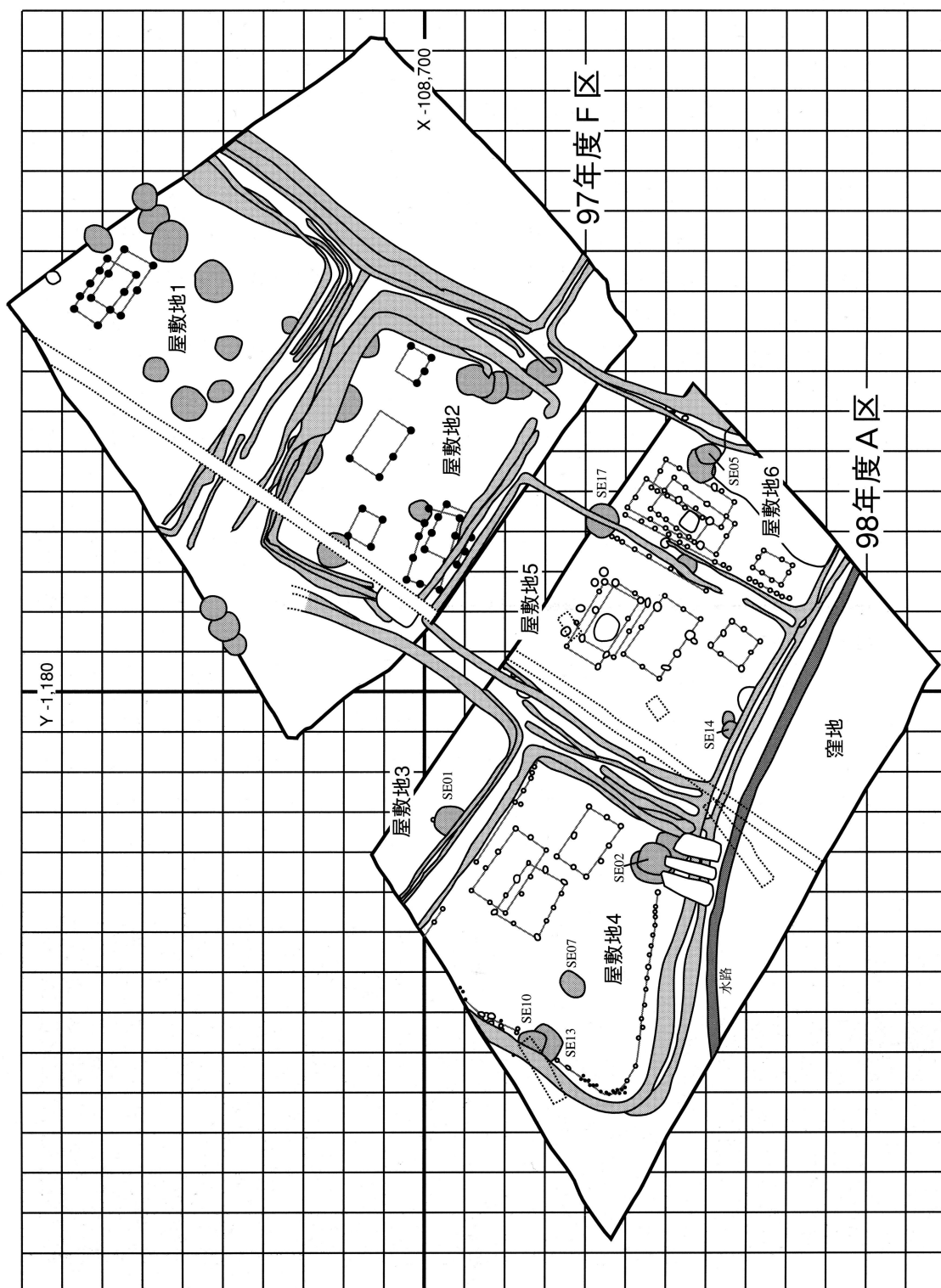
奈良時代竪穴住居



第3図 主要遺構図（1：3,000）



第4図 B区Ⅰ期主要遺構図（1：800）



第5図 戦国時代の遺構配置図 (1:800)

A区の概要 98A区は郷上遺跡の南端に位置し、97年度に調査されたF区の南側の調査区である。97F区では戦国期から近世にかけての屋敷地が確認されているが、今回の調査ではF区から、続くと考えられる屋敷地を確認することができた。

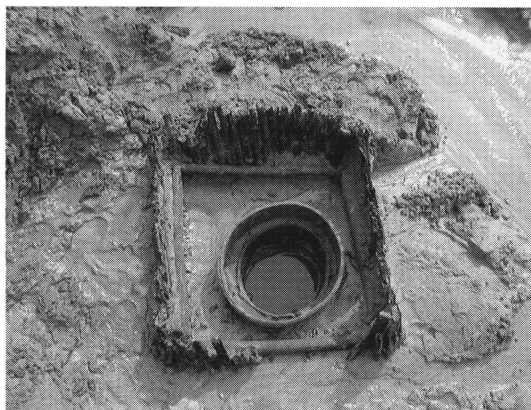
今回確認できた屋敷地は4つで、幅2～3mの溝を巡らせた一辺が30～40m程の規模のもので、その内部には掘立柱建物や井戸が配置されている。屋敷地4を例に見てみると、溝に囲まれた区画の北東部分で掘立柱建物が、その南側に井戸が配置されている。区画の南西部分にも多数のピットが展開しているが、出土する遺物は須恵器が中心で時期的に古い遺構が多い。また東側の屋敷地5でも、屋敷地内の南側部分では遺構、遺物ともほとんど確認できず、屋敷地4と同様な状況であると考えられる。このことから屋敷地内の空間利用の基本パターンとしては、北側部分に母屋と考えられる5m×10m規模の建物があり、その南に5m×5m程のやや小規模な建物や井戸が配置され、屋敷地の南側部分は作業場的な空間が広がっていたと考えられる。

井戸は平面正方形の井戸枠内に曲物が入られる構造のもの（SE01、02、04、17）と、桶組のもの（SE05、10、13）があるが、前者は井戸枠として竹材を併用するという特徴を持っている。

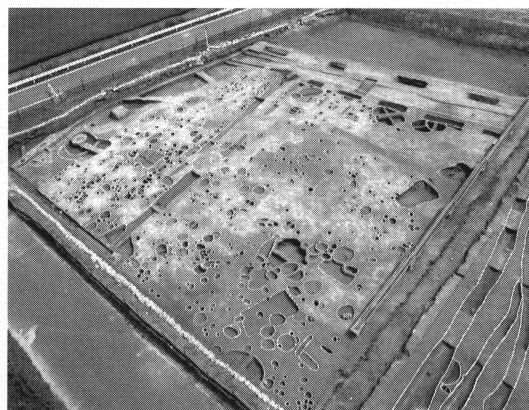
出土遺物としては羽付鍋や内耳鍋といった土師器煮炊具が大半を占め、若干の瀬戸美濃窯産陶器（古瀬戸後期末から大窯前半のものが主体）が出土しているといった状況で、全体的に遺物量は多くない。この他屋敷地6の掘立柱建物周辺からはフィゴの羽口や鉄滓が出土している。

今回確認できた屋敷地は、旧鴛鴨ムラの南西端に位置している。屋敷地4から6にかけて続く南側の溝はちょうど微高地の縁を巡るような形で続いており、この溝を境にして北側に屋敷地が、南側には湿地的な環境が広がっていたと考えられる。このように洪水の被害を受けやすい立地ゆえに、97F区に比べて早い段階で屋敷地として利用されなくなったものと考えられる。

（春日井 毅・伊藤太佳彦）



SE01



屋敷地5